The Japan Lung Cancer Society

ので，肺癌が21例(75%)と最も多かった．治療は通常分割照射で40～60Gy照射し，21例(75%)で臨床症状の改善が得られた．全症例の平均生存期間は9.0ヵ月，中間生存期間は5.1ヵ月であった．上大静脈症候群に対する放射線治療は，QOLの向上が認められ有用であると考えられた．

20．パンコースト型肺癌の放射線温熱併用療法

産業医大放射線科　寺嶋廣美
今田　肇，中田　肇
同　第2外科　安元公正

1980年7月より放射線療法を行ったパンコースト型肺癌は27例であった．そのうち1987年4月からは可能な症例では温熱療法の併用を行った(13例)．放射線療法は通常分割照射にて50～70Gy照射し，加温はサーモトロンRF 8にて，週1～2回，計5～10回行った．加温併用例では著明な抗腫瘍効果が認められ，切除された4例中3例では癌細胞は認められなかった．中間生存期間は25ヵ月で，除痛効果も得られた．

21．癌性心膜炎，放射線心膜炎について

鹿児島大放射線科　森山高明
向井浩文，野口一成，中條政敬
田之畑クリニック　田之畑修朔

当科にて経験した，肺癌に伴う癌性心膜炎と放射線心膜炎について報告した．癌性心膜炎は12例あり(腺癌9例，小細胞癌2例，大細胞癌1例)排液のみ5例，チューブドレナージを7例に施行した．6例に抗癌剤を心嚢腔内に投与した．全例癌死であった．初回穿刺日からの生存期間は58.3日であった．放射線心膜炎は4例あり(全例腺癌)，経過が長く保存的治療で心嚢液が消失することがあった(75%)．

22．肺癌による気管支狭窄に対してexpandable metallic stentが一時的には有用であった1例

鹿児島大放射線科　平木嘉幸
吉満　彰，向井浩文，中條政敬
県立大島病院内科　有村文男

肺癌による気管支狭窄に付随した無気肺に対してexpandable metallic stentを挿入し一時的には呼吸困難，無気肺が著明に改善したが，留置7ヵ月後左上葉の無気肺が出現し長期留置には種々の問題点があると思われた症例を経験したので報告した．stentの長期留置は粘液移送を妨げたり，2次的に気管支の炎症等を引き起こし無気肺などの合併症を引き起こす可能性があり，今後抜去が簡単なstentの開発が待たれる．

23．腫瘍径3cm以下の非小細胞肺癌切除例の臨床病理学的検討

長崎県立島原温泉病院外科
篠崎卓雄，松尾繁年，高山和之
石井辰洋，山口　聡，大久保仁

腫瘍径3cm以下の非小細胞肺癌66例を検討した．1)リンパ節転移率は18.1%であった．2)腫瘍径1.2cm以下のものにはリンパ節転移はなかった．3)p-N因子が最も予後に関与していた．4)腺癌ではp-T1N0M0であっても血行性転移への対策が必要と思われた．

24．腫瘍径2cm以下肺癌切除例の検討

佐世保市立総合病院外科
南　寛行，糸柳則昭
窪田芙佐雄，中村　譲
同　内科　荒木　潤，増本英男
前崎繁文，浅井貞宏

切除標本の最大径が2cm以下の肺野型肺癌45例の臨床的検討を行った．全症例の5生率は72%であった．予後因子では，N因子と組織分化度に有意差を認めた．腫瘍径1.5cm以下では，腫瘍径1.6cm以上2.0cm以下に比べ，リンパ転移は低率であった．

25．原発性肺癌に対する縮小手術症例の検討

大分医大第2外科　三浦　隆
田中康一，玉井英世，工藤哲治
岡田秀司，迫　秀則，葉玉哲生
内田雄三

1983年3月から1994年4月までの12年間に肺葉切除にみたない縮小手術を施行した原発性肺癌症例24例に対し検討を加えた．平均年齢70.0歳(51～82)，$T_1$15例，$T_2$6例，$T_3$3例，扁平上皮癌12例，腺癌10例，腺扁平上皮癌と大細胞癌各1例で，術式は，区域切除21例，部分切除3例であり，うち2例は気管支形成術を併用した．24例中7に再発を認め，うち6例は局所再発であった．また4例に癌死を認めた．

26．肺大細胞癌切除例の臨床的検討

大分県立病院胸部外科
中村昭博，内山貴堯，山岡憲夫
村岡昌司，近藤正道

当科で経験した大細胞癌は58例で，うち31例(53.4%)に切除術を行った．切除例の年齢は32～81歳．男性25例，女性6例であった．病期はI期6例，II期3例，III期19例，IV期3例と進行例が多く，治癒切除は17例(54.8%)であった．DNA ploidyでは，測定22例中19例(86.4%)と高率にAneuploidyを呈した．切除例の予後は5生率は33.2%で，悪性度の高さが示唆されるが，I期では80%の5生率が得られており，早期例の切除では長期予後も期待できる．

27．N2肺癌切除例の検討

NII-Electronic Library Service